

美の観賞会だより 第3号

令和元年5月18日

秋山卓男

美の原点 (3) 花

百花繚乱、令和元年5月を迎えた。5月は、つつじを始め様々な花々が咲き乱れ、新緑もまぶしく美しい季節である。天平2年(730)正月13日大宰府の師(そち、長官)大伴旅人(665~731)の家に数十人が集まり庭に咲いた梅の花を愛でながら、梅の花を題材に32首の歌を詠んだ。その歌の序に、旅人はその日を「初春の令(よ)き月、気淑(よ)く風和(なご)み」と表現している(万葉集巻5梅花の歌32首ならびに序)。元号令和の語源である。梅の花の香りが漂ってくるようなよき元号であると思う。人は古より花の美しさと香りを楽しんできた。何故花を美しいと思うのか、人類永遠の謎である。

人は美しきものを見たとき我を忘れる。この我を忘れる心の状態が美の原点であると思う。人は花を見ると美しいと思う。これは事実であり誰人も否定できないであろう。ではなにゆえ美しいと思うのか、誰も答えられない。人には花を見ると美しいと感ずる本能が備わっているとしか言えないであろう。富士山や、日の出を見たときの神々しい美しさではなく、何か艶めかしい美しさを感じず。その違いはどこから来るのであろうか。

花には、中心に雌しべが1本あり、その周りを複数の雄しべが取り巻いている。雄しべの先端には花粉があり、その花粉が雌しべの先端(柱頭)について受粉となる。花自身では雄しべの花粉を雌しべにつけることはできない。受粉する為には昆虫や鳥の助けがいる。雌しべと雄しべを取り囲んで花びらがある。花びらは、赤や黄色や青で遠くから目立つような色をしている。昆虫や鳥は花びらを見て花に集まってくる。花には甘い蜜があるのを知っているからだ。そして蜜を食べる。その時花粉が体につき、ついでに花粉は雌しべの柱頭につき受粉となる。受粉によって雌しべの根元の胚珠から実ができ、実の中に種がある。すなわち、花は自らの種を作るための植物の生殖器である。もともと生物には雌雄の別は無かった。より複雑で高度な生物を造るために雌雄の別が生まれた。植物は受粉する為により目立つ花を造った。すべての生物は遺伝子という構造体をもつ。複雑で高度な生物は遺伝子の数が多く、遺伝子は環境との対話の中で、より複雑になり、数を増やしていった。昆虫や鳥の遺伝子と人間の遺伝子の60パーセントは共通であるという。人間が昆虫や鳥と共通の遺伝子をもっているということは、遺伝子に昆虫や鳥と同じ習性を記憶しているということであり、その記憶が花を見ると美しいと思わせるのであろう。また、神々しさではなく、艶めかしさを感じさせるのであろう。

小さい花も、大きい花も、すべての花はそれぞれ個性があり美を感じず。花びらは人間の

顔を連想させる。人間の顔には一人ひとり個性があり、年齢や経験や環境により変化していく。特に女性は顔を美しく見せるために頬に頬紅を塗り、赤い口紅をつけ、瞼に青いアイシャドウを塗って化粧をする。また、花からできた香水を身につける。美人の姿の美しさを「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」と花で表現している。人間の顔を描いた大首絵の喜多川歌麿（1753～1806）の美人画や、東洲斎写楽（生没年未詳）の役者似顔絵は浮世絵の一大ジャンルを構成している。西洋でも肖像画は、古来より重要なテーマであった。

花には木の花と草の花がある。桜や梅は木の花であり、向日葵やタンポポは草の花である。花の木の寿命は長く、草の花の寿命は短い。日本画の題材は、梅に鶯、夜桜と月などが代表的なものである。草の花は花瓶に生けられ絵の題材となる。ゴッホの向日葵は草の花の最高傑作であろう。白樺派の雑誌、大正10年2月号にゴッホの向日葵が掲載され、それを見た棟方志功が画家を目指すきっかけになったという話がある。この絵は、残念ながら戦災で焼けてしまった。今、損保ジャパン日本興亜美術館でゴッホの向日葵を見ることができる。荒いタッチで生命の躍動感を表現していて、圧倒される。クロード・モネ（1840～1926）の水生植物睡蓮の連作も見ごたえがある。抽象画のような絵に心が静まる。横山大観と一緒に第1回文化勲章を受章した藤島武二（1867～1943）の「アルチショ」も素晴らしい。チョウセンアザミを描いたものである。花の紅色が印象的である。梅原龍三郎（1888～1986）の「ばら」「牡丹」もよい。海野光弘氏（1939～1979 昭和33年静岡商業高校卒）の版画に素晴らしい草の花の傑作がある。「五箇のコスモス」「五箇のおにゆり」「島の陽」「あじさいの門」「幻影の鬼無里」である。大胆な構図で、草の花を画面の前面に大きく描いているのが効果的である。これらの作品は島田市の島田市博物館分館海野光弘記念館で見ることができる。木の花の傑作は日本画に多い。伊藤若冲（1716～1800）の月下白梅図、横山大観（1868～1958）の「夜桜」「紅葉」「春園の月」も傑作である。



<海野光弘・あじさいの門>

日本には華道という芸術がある。室町時代末に池坊専慶が池坊の生け花の基礎を作り、その流派は現在まで続いている。日本にしかない芸術で、日本人が如何に花の美を大事にしてきたかがわかる。勅使河原蒼風（1900～1979）が斬新で大型の作品を発表し、世の注目を集めた。彼は、草月流を創設した。

花札という遊びの札があるが、この札のデザインがなかなか美しいのである。余談になるが任天堂は花札のメーカーから世界的なゲームメーカーとなった。

次回は、「美の原点（4）鳥」を発行いたします。